



Data

監督: 土井裕泰
脚本: 野木亜紀子
原作: 塩田武士『罪の声』(講談社文庫)
出演: 小栗旬/星野源/松重豊/古館寛治/市川実日子/火野正平/宇崎竜童/梶芽衣子/篠原ゆき子/原菜乃華/阿部純子/正司照枝

👁️👁️ みどころ

1984年、日本中を巻き込み震撼させた驚愕の大事件が発生！大胆不敵な手口で警察とマスコミを翻弄した犯人は、きつね目の男！現金授受成功の確率は低いから、これだけの大捜査網なら大丈夫。そう思っていたが・・・。

「罪の声」ってどんな声？原作は大ヒットだが、残念ながら原作ではそれは聴けない。しかし、映画なら！しかして、ある日、押し入れから出てきたテープの声は・・・？

警察の無能ぶりと多少の筋の粗っぽさは横に置き、2人の主人公の執念の取材能力と調査能力に注目！そして、そこから生まれてくるスリリングな展開をしっかりと確認したい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■ 35年前、日本中を巻き込み震撼させた驚愕の大事件は？ ■

1974年4月に弁護士登録をした私が独立して自分の事務所を持ったのは1979年7月。それから5年後の1984年7月には、約28坪の区分所有ビルを購入し、物的にも人的にも規模を拡大した。時代は、昭和30年代と同じような高度経済成長の真っ只中にあった。それから5年後の1989年に、土地バブルの崩壊に至るとは誰も予想できなかったが、あなたはその1984年に起きた、“日本中を巻き込み震撼させた驚愕の大事件”を知ってる？公開された“きつね目の男”は今でもハッキリ覚えているはずだ。

本作は、塩田武士のベストセラー小説『罪の声』を原作としたミステリー映画だ。食品会社を標的としたこの一連の企業脅迫事件は、誘拐や身代金要求、そして毒物混入など数々の犯罪を繰り返す凶悪さと同時に、警察やマスコミまでも挑発し、世間の関心を引き続けた挙句に忽然と姿を消した謎の犯人グループによる、日本の犯罪史上類を見ない劇場型犯罪だった。その事件名は、脅迫の被害を受けた大手食品会社である「ギンガ」と「萬堂」

の名前を取った「ギンガ萬堂事件（ギン萬事件）」。また、そこにはマスコミに文書を送り付けた「くら魔天狗」も登場するが、寡聞にして私はそんな事件を聞いたことがない。いや待てよ、導入部で語られるこの「ギン萬事件」の内容を聴いていると、これはあの・・・？

■□■現金授受成功の確率は？それよりも株価操作で？■□■

『ゲティ家の身代金』（17年）（『シネマ42』172頁）は面白い映画だったが、同作で見ると身代金目的の誘拐事件で、現実に現金の授受を成功させる確率は極めて低い。それなのに、35年前の1984年に起きた「ギン萬事件」では、大阪府警を中心とする大規模捜査網が敷かれたが、犯人の要求のままに金を積んだ車が走りまわされた挙句、犯人の検挙に失敗したから、アレレ・・・。犯人側も現金を受け取れなかったのは大きな痛手かもしれないが、それ以上に捜査陣の面目は丸つぶれになったから、いやはや・・・。

ちなみに、犯人側は、このような形で現金を受け取れなくとも、食品会社に対して「商品に毒物を入れたぞ」と脅迫し、それをマスコミに面白おかしく宣伝すれば、その食品会社の株価は？そこに目をつければ、何も警察と対峙しなくても合法的な株の売買でボロもうけすることができるのでは？

なるほど、その発想は面白い。大日新聞の大阪本社の記者・阿久津英士（小栗旬）は、イギリスに出張して、1983年のハイネケン社長誘拐事件を調べる中でそんな話を聞き、「ギン萬事件」への関心を高めていったが・・・。

■□■脅迫は子供の声！なぜ俺の声が？■□■

本作は、京都市内で紳士服のテーラーを営む曾根俊也（星野源）が、偶然押し入れの上部にしまっていた箱を開けるところから物語がスタートする。その箱が何年もそこに置いたままになっていたという設定は少し変だが、本作では、入院している曾根の母親が「何としても一度は家に戻りたい」と駄々をこねる風景と相まって、その設定にも納得・・・。

それはともかく、その箱の中に入っていた、英語を含めてびっしり書かれていた一冊の黒革の手帳と、1本のテープが本作のストーリーのカギになっていく。そのテープを聞いた曾根がビックリしたのは当然。それは、子供時代の自分の声だったからだ。これは一体ナニ？なぜ、こんなものがここにあるの？

土地バブルが崩壊した1989年に昭和の時代が終わり、その後の平成の30年間も終わった今の時代は、ネットを調べればどんな情報でも入手できる。そこで、曾根が「ギン萬事件」を調べてみると、そこには脅迫に使われたという子供の声。そして、その声はこのテープの声と同じだったから、アレレ・・・？

■□■2人の取材能力にビックリ！逆に警察の無能ぶりは？■□■

本作のもう一方の主人公になる阿久津は、社会欄が嫌になって文化欄を担当していた男だが、年末に掲載予定の「ギン萬事件」の企画記事に応援要員として駆り出されたことによって、素晴らしい取材能力を見せていく。他方、曾根も本業が忙しいはずだが、スクリーン上では、素人探偵ながら、当事者色を色濃く出していく中で、キーマンとなる父親の

兄だった曾根達雄を巡って、一步一步真相に迫っていくことに。

本作を観て驚いたのは、ラストには「ギン萬事件」の犯人が特定されるとともに、事件の全貌が明白にされることだ。本作の一方の主人公である曾根は、犯行時8歳だったとはいえ、形式的には「ギン萬事件」の共犯になるから、テープを聞いた時点で警察に相談（自首？）すべきが当然。しかし、それでは面白いストーリーにならないため、本作のような構成になったわけだが、本作のように、新聞記者である阿久津の取材能力と、共犯者である曾根の素人探偵のレベルをはるかに越えた調査力が存分に発揮されて、犯人の特定、事件の全貌解明まで行ってしまうと、逆に警察の無能ぶりが目立ってくる。35年前、あれほど大規模な捜査網を敷きながら、なぜ警察は阿久津と曾根が辿り着いた人物まで辿り着けなかったの？犯人が1人でひっそり引きこもっていたのならともかく、本作に見るような複数犯での大規模な計画であれば・・・？さらに、複数犯の場合によくある、仲間割れが本作で観るように顕著に現れていた場合であれば・・・？

■□■オーダーメイドのスーツはHow Much?■□■

ホワイトカラーの男性にとって、スーツとネクタイは必需品。高度経済成長期の日本はずっとそんな時代が続いたが、今やノーネクタイは当たり前。そして今や、スーツの大型専門店だったアオキや洋服の青山も、本業をスーツから焼肉やカラオケに移さざるを得なくなっている。そんな時代にあっても、なお、「どんな体にもフィットするスーツを作りたい」と願う職人気質の曾根の気持ちは貴重だが、スーツのオーダーメイドの個人商店が京都で生き残れるの？

それは、本作がテーマとした「ギン萬事件」とは全く無関係な話だが、本作ではスーツが不可欠な業種である阿久津が、意外にも袖のボタンが取れたスーツを着ていることを曾根に指摘されるから、そこにも注目！また、本作では、脅迫に使われた子供の声が、曾根だけでなく他にも男女2人いたことがストーリーに膨らみを持たせているが、その2人は今どうなっているの？生きていれば、男の子はほぼ曾根と同じ年齢のはずだが、彼はスーツを着ているの？

本作ラストは、近時テレビでよく見かける記者会見の風景。しかして、今その記者会見に臨もうとしている男は誰？そして、その時に彼が着ているスーツは・・・？

2020（令和2）年9月14日記